

# 英語の語順を感覚でつかむ指導法の工夫

—日本語の語順との比較を通して—

浦添市立浦西中学校

赤 嶺 保 久

---

## 目 次

I	テーマ設定理由	1
II	研究の目標	1
III	研究の仮説	1
IV	研究の内容	2
	1 基本5文型について	2
	2 特殊構文について	4
	3 助動詞について	5
	4 副詞について	6
	5 形容詞について	7
	6 準動詞について	8
	7 疑問文及び否定文について	10
	8 複文について(グラフ表示)	12
V	授業実践(指導法の工夫)	
	1 基本5文型の指導	14
	2 基本5文型への数字表記の試み	15
	3 数字表記の利用による授業実践	16
VI	研究の成果と今後の課題	
	1 Dr. Palmer による Verb Patterns の数字表記による分析 (研究の成果として)	18
	2 今後の課題	20
	《引用・参考文献》	20

# 英語の語順を感覚でつかむ指導法の工夫

— 日本語の語順との比較を通して —

## I テーマ設定の理由

ミンガン大学のフリーズという人は、言語学習の段階を三つに分類した。それは、「第一段階は、その言語特有の音声組織になじませる。第二段階は、英語なら英語独特のストラクチャーになじませる。第三段階は、語彙を増やしていく。」としている。そのことを逆にみると、語彙を増やすためには、まず語を音声組織で捉え、さらにそれらを文（ストラクチャー）として捉える能力が求められることになる。本研究は、その中間的段階と言えるストラクチャーになじませる。ということをテーマとしています。その理由のひとつに、私たち日本人にとって、語族がまったく違う英語学習においてそのことが、大きな壁と思われるからである。

また、文部省の中学校外国語指導資料の英語の新しい授業観、の中には「言語活動の指導を通してコミュニケーション能力を育成する指導を一層重視すること、また、基礎的・基本的事項の指導を重視し、指導方法を工夫し、新しい学力観に立った指導を創造し、指導と評価の一体化を図ることが大切である。」と述べられ、また、コミュニケーション能力の育成の(6)で「英語には独特の発想や表現の方法がある。通常、主語が文頭に置かれ、続いて動詞というように主語・述語が明確で、語順が大切な言語である。英語は、動詞が文末に来て文意を決定する日本語との差違が大きいことに留意することが大切である。」とし、さらにコミュニケーションへの積極性の育成の(6)で「言葉の学習を通して、言葉の仕組みや機能などに気付かせることにより、言葉の学習への興味や関心を高め、積極的に取り組む態度を育成することが大切である。」としている。

本テーマは、上記のような観点に基づき、英語の学習指導において、構造的に把握していく目を養うことを出発点とし、指導要領の外国語の目標に近づく一助となることを目指すものである。具体的な考察の方法として、英語の構成を語順として捉え、さらに語順を順番とし、数字で構造を捉えていくことにする。そのことは、日本語との語順の比較を容易にすると思われるからである。またさらに「数学は、一種の言葉である。」といわれ「数学は、全ての科学の王であり同時に家来である。」とも言われている。そこで指導法の工夫として、数学の簡単な記号やグラフなどの利用も試みていくことにする。

## II 研究の目標

本研究は、英語学習指導において、語順に目を向け、英語の構造を数字で表記することを試みる。またその表記が、日本語との中間的存在（橋渡し）となるように、その表記法を工夫し、その指導法がもたらす学習効果について調べようとするものである。

## III 研究の仮説

英語と日本語の語順がまったく逆の順であることが多いことや、英語の疑問文や否定文がある定位置での移動や付加によることなどに、気付くことにより、英語への興味・関心が高まりさらに英語への自信が付き、自主的・創造的な学習への取り組みが出来るようになるであろう。

#### IV 研究内容

中学校での学習範囲を基礎として、項目別に順を追って考察していくことにする。

##### 1 基本5文型について

英語の文は、主語 (Subject)、動詞 (Verb)、目的語 (Object)、補助 (Complement)、の4つの主要素と修飾語 (Modifier) によって成り立っている。基本5文型とは、動詞の性質、つまり動詞の後に付く目的語や補語の現れ方、のパターンによって基本的に5つに分類したものである。それらをまとめると、表-①のようになる。

表-①

目的語の有無	補語の有無	語順	文型名
自動詞 (目的語無し)	完全自動詞	S + V	第1文型
	不完全自動詞	S + V + C	第2文型
他動詞 (目的語有り)	完全他動詞 (授与動詞)	S + V + O	第3文型
		S + V + O + O	第4文型
	不完全他動詞	S + V + O + C	第5文型

次に第1文型から順を追って本テーマの「日本語との語順の違い」に注目しながら考察していく。

##### (1) 第1文型 (S + V)

① Birds sing. 鳥は、歌う。

この第1文型では、和訳も同じく、主語+動詞の語順である。では他に違いはないだろうか。(もちろん単語の違いは別とする。) 下記のように比べてみた。

Birds sing. --- Birds の (s) --- 日本語に現れない数の表現 (複数形)  
 -) 鳥は、歌う。 --- 鳥は、の「は」 --- 英語に現れない主語の表現法 (格助詞)  
 S    ϕ    --- (記号を簡略して、次からは別の記号にした。)

##### (2) 第2文型 (S + V + C)

② Emily is an American girl. --- (an) --- 日本語に現れない表現 (不定冠詞)  
 エミリーは、アメリカ人の少女です。 --- 「は」 --- 上に同じ

この第2文型で、和文との語順をみると、①同様に主語のスタートは同じであるが、動詞と補語とは逆の順である。また an American girl の語順をみると、1語の形容詞+名詞であり日本語と同じである。また (an) については、上記したように日本語にない不定冠詞である。それは、英語での名詞の表現は、数や既知か否かといった厳密なとらえ方でなされることを示している。私たち日本人には、注意を要することのひとつである。

③ He looks very happy. --- looks の (s) --- 日本語にはない (3単現のs)  
 彼は、とても幸せそうだ。 --- ϕ    cf; (He は主格である。)

この③も②同様の語順である。また very happy の語順も日本語と同じであるが、very は副詞であるが、形容詞と副詞だけを修飾する特別な語である。副詞については後で考察したい。

また、He は代名詞でその形が「彼は」という日本語に対応する。英語の代名詞は、格変化があり覚えなれないといけない大事なことのひとつである。さらに英文において代名詞は、和文

よりはるかに頻繁に現れる。それは、先に示した名詞の表現の厳密さと同様に考えられる。

次にlooksの(s)は、主語が三人称の単数形で、現在形の動詞に付くものであり、そのことは、英語では主語が動詞の形に影響をおよぼすことを示している。(cf; 三単現のsは、Be動詞のisのsとの関係も音としても興味深く思える。)

④ She is very cute. --- is

彼女は、とてもかわいい。--- ϕ

この④も③②同様の語順である。ただBe動詞+形容詞において、Be動詞は日本語には現れない。(訳さないほうが、自然に聞こえる。) またBe動詞が時制を表すことも気を付けたい。

(3) 第3文型(S+V+O)

⑤ I play tennis. --- ϕ

私は、テニスをします。--- 「を」--- 目的語を表す。(格助詞)

第3文型の語順も先の第2文型と同様に、主語のスタートその後は、動詞と目的語が日本語と逆である。また目的語を表す「～を」の表現は、主語の「～は」がそうであったように代名詞以外の名詞では、格変化はなく、動詞との位置関係によって決定する、というとても重要な英文のきまりを示している。次に第2文型の補語とこの第3文型の目的語の見分け方としてよく、S=Cに対してS≠Oという方法がある。

(4) 第4文型(S+V+O+O)

⑥ I showed Tom the pictures. --- picturesの(s) --- 日本語に現れない(複数形)

私は、トムにその写真を見せた。--- 「に」と「を」--- 両方とも目的語(格助詞)

第4文型の語順は、主語のスタートその後は、動詞と目的語が日本語と逆で、基本的には、第3文型と同じであるが、それは目的語を2つ取っている。そこでその2つの目的語の語順をみると、「その写真をトムに」としても意味は分かるが、上の訳が一般的のようだ。また間接目的語に(to; for)を伴って直接目的語の後に置く表現(I showed the pictures to Tom.)もあるので、第4文型は、第3文型の特殊なものであるともいえる。その文型に使われる動詞は、授与動詞と呼ばれるものであり、(GIVE)がその代表といえる。

(5) 第5文型(S+V+O+C)

⑦ She made him happy. --- ϕ

彼女は、彼を幸せにした。--- ϕ

第4文型では、二つの目的語の和訳語順はどれが先でも意味の理解はできたが、この第5文型をみると「幸せに彼をした。」では、和訳にならないようだ。そのことは、第5文型の補語が目的語の補語であり、(He is happy.)の関係であり第2文型でみたように主語は日本語でも補語の前に来る、ということと関連させて理解したい。

次に、中学の教科書Sun Shineに出ている主な動詞を集合の記号を借りて挙げておきたい。

V1 = { go, walk, run, sit, stand, sing, come - - - }

V2 = { BE; look, become, turn, sound, taste - - - }

V4 = { GIVE; show, tell, ask, teach, make - - - }

V5 = { call, name, make - - - }

## 2 特殊構文について

前述の基本5文型のほかにも、挨拶文 (Good morning; Hi;...) や感情を表す文 (Oh!; Wow...) 等、決まりきった表現や省略文がある。それらは、基本5文型の中に分類できない表現であるが、日本語にも同じような表現があるので、特に問題にならないと考えられる。ただ (Good morning = おはよう) という理解の仕方では、文化の違いを無視することになりそれではこまるが、ここでののは、語順という視点からである。次に、ちゃんとした文の形 (主語と動詞がある文) をしているが、語順の倒置などがある特別な文を例を挙げて考察していく。

### (1) There (be) ... の構文

① There is a book on the desk. --- 文頭のThere --- 日本語に現れない。

その机の上に、(一冊の) 本がある。 --- φ

上の文は、there構文と呼ばれていて、(There+V+S+Place.) の語順になる文型である。訳としては、「(一冊の) 本が、その机の上にある。」としても良い。この文の要素や意味から判断すると第1文型となるが、文の形式からみるとThereが主語の位置にあり、Sが補語の位置にあるともみれる。つまり形式上は、第2文型の仲間になる。この構文は、Sが、新情報であり、未知なものの存在を表している。つまり There is my book on the desk. という文は、通例ではなく、My book is on the desk. という表現をする。また同様に A book is on the desk. という文も通例でない。そのことは、英語における名詞表現の厳密さと関係していると思われる。また、このthere構文を「存在文」といい、定名詞を主語にする「所在文」との区別がある。

### (2) It + (for~) + to ... の構文

② It is difficult for me to read the book. --- 文頭のIt --- 形式主語

その本を読むことは、私にとって難しい。 --- 読むことは、の「は」

上の①の文もそうであるが、この②の文も英文の後ろから訳すると、立派な日本語になる。さらに、①の文と比較しながらみていくと、①が不定名詞の存在を表すとき、それを主語の位置におくことをさけるための文、であったのに対して②の文は、主語が不定詞句で長いために、Itを主語の位置に仮におき、不定詞句を文末に移動した文である。そこで和訳するとき不定詞句に主語を表す「は」を必要とする。またItもThere同様に日本語に現れない。

### (3) Itの時間; 天候; 距離, 等を表す用法

③ It is four thirty now. ④ It rained yesterday. --- 両文とも主語のIt。

今、4時30分です。

昨日は、雨が降った。 --- 昨日は、の「は」

上の③、④に使われているItの用法は、日本語にはない。そこで④の訳文にあるように日本語では、yesterdayを主語のように表現している。③は第2文型であり、④は第1文型である。語順でみると、上の①、②と同様である。ここでは、特に英語の主語表現と日本語のそれとの違いがみえる。また、「雨が降った」のようにrainedがあたかも文の意味を表す訳となり日本語の主語表現の曖昧さがうかがえる。

日本語に現れない英語表現、また逆に英語に現れない日本語表現もまだ多くあると思われるが、そこでひとまずこの2の考察を終える。

今まで、文の主要素である、S,V,O,Cを中心にみてきた。次に動詞を助け、時制・法・態などを示したり、動詞にいろいろな意味を付け足す助動詞。また主に動詞や文全体を修飾する副詞。また名詞類を修飾する形容詞。さらに本来、動詞であったのが形をかえて名詞；形容詞；副詞などの働きを兼ねる、準動詞と呼ばれる、不定詞・分詞・動名詞について、順を追ってみたい。

### 3 助動詞について

先に示したように、助動詞の働きはとても大きい。ここでは、その位置やそれにつづく動詞の形などに目を向けながら例文をとおして考察していく。

(1)+原形動詞の形を取る仲間。--- (Helping verbの頭文字でHとする。)

① I can help you. --- ϕ

私は、あなたを手伝うことができます。--- ϕ (手伝える。でもいいので)

上の文の語順をみると、主語のスタートで残りは、全部逆に(後ろから)訳すれば、ちゃんとした和訳になる。特にここでは、前述との重複をさけるため、can helpに注目したい。

② He will come soon. --- ϕ

彼は、まもなく来るでしょう。--- ϕ

この文でも、will comeが「来るでしょう」という語順に対応していることに、注目したい(soonについては、後で考察したい。)さらに、この文では、三・単・現のSが現れないことも気をつけたい。つまり助動詞(H)+動詞の原形であり、また助動詞にもそのSは付かない。また、この仲間の助動詞(H)は、一つの文に一つしか使えない。そこでcanに対してbe able to. また、willにbe going to. などの表現があり、後でまとめた。

③ She doesn't like watching TV. --- does --- 日本語に現れない。

彼女は、テレビをみることを好まない。--- テレビを、みることを--- 二つの「を」語順をみると、①、②同様に主語のスタートで残りは、全部逆の和訳でよい。でもそこで問題なのが、do (does)である。それは、否定の意味を表すnotが直接には、動詞につかないという英語の表現法を示している。つまり英語では、否定文(疑問文もそうだが)にするためには、助動詞の働きを必要とすることをしめしている。(be動詞の本動詞用法は、例外)

さらにdo (does)は、can, will, must, mayなどと違い、日本語に現れず、また三・単・現のeSを取ることも他の助動詞(H)と異なることが示されている。

(2)+分詞の形を取る仲間。--- (helping verbの頭文字でhとする。)

④ I am studying English. ④ She is liked by everyone. --- ϕ

私は、英語を勉強しています。 彼女は、みんなに好かれている。--- ϕ

上の④、④の二つとも①、②、③と同様に主語のスタートで、残りは、全部逆の和訳でよい、Hとの違いは、というと動詞が分詞の形であることである。いいかえると、be+現在分詞で進行形を表現し、be+過去分詞で受動態を表現していることを示している。

⑤ He has lived in Japan for five years.

彼は、5年間日本に住んでいる。

上の⑤の語順も、主語スタートで、残りは、全部逆の和訳でよい。この文は、have (has)

+過去分詞で完了形を表現していることを示す。またin Japan for five yearsの語順については、副詞のところを考察したい。

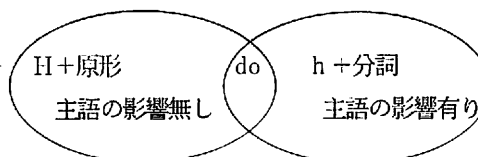
次に助動詞を集合の記号を使って下記のようにまとめてみた。

H = { can, will, may, must, do (does) }, H' = { be able to, be going to, have to }

(II) = { could, would, might,  $\phi$ , did }

h = { is; am; are, have; has, do (does) }

(h) = { was; were, had, did }



#### 4 副詞について

副詞は、英語でadverbといい、それは、verb (動詞) にadd (付け足す) という意味から成り立っている。前述したように、それは、動詞の修飾を主とするが、文全体や形容詞さらに同じ副詞も修飾する。英文における副詞の位置は、主要素のS,V,O,Cのようにいつも決まった位置にはならないが、一般的に定位置があるといえる。そこでも日本語の語順と比べながら、この点に目を向けながら、考察していく。

(1) 場所 (Place ; where) を表す副詞と時 (Time ; when) を表す副詞の位置。

① I went to school yesterday.

私は、昨日学校へ行った。

上の文は、第1文型である。その文における副詞の位置は、文末であり和訳も主語スタート残り逆の順でよい。さらに気を付けたいのは、to school yesterdayであり、場所が先で時は、その後に来ることである。また和訳でも「私は、学校へ昨日行った。」では、どうもぎこちない。

② He studies English at the library everyday.

彼は、毎日図書館で英語を勉強します。

この文は、第3文型である。①の文との比較をすると、副詞が直ぐ動詞の後に位置したのに対し、②の文では、目的語があり、その目的語の後に副詞が位置している。さらに見方を変えると②も①と同じように、副詞は、文末に来るといえる。

(2) 様態や方法 (how) を表す副詞と目的や理由 (why) を表す副詞。

③ I got up early to take a walk.

私は、散歩をするために早く起きた。

この文では、earlyがto take a walkより先に位置している。この文でも、「早く散歩するために起きた」では、ぎこちなく①②と同じように、主語のスタート残り逆の順となる。さらにこの4つは、(where), (how), (why), (when) の順序で並ぶことが、多いようだが、動詞の意味的な性質により、一様でない。

(3) 頻度を表す特別な副詞。(special timeということでもの記号で表す。)

④ She usually plays tennis after school.

彼女は、普通放課後テニスをします。

上の文の語順を、今までみてきたとおりに訳すると、「彼女は、放課後テニスをします普通。」となり、どうも和訳になりにくい。それは、英文中で、副詞のusuallyが、一般動詞の前



に位置しているためだ。そこでこの副詞の仲間を含む文では、特に（主語 + t）として訳にも気を付けたい。また、否定を表すnotが、助動詞の後に位置したが、tの仲間は、それらの後に位置することも気を付けたい。中学の教科書Sun Shineに出ている主なtの仲間を挙げておく。

t = { usually, always, sometimes, ever, never, really, often, only, just, still, - - - }

#### (4) 副詞のveryについて

- ⑤ He runs very fast.    ⑤' She is very beautiful.

上の二つの例文のように、veryという副詞は、形容詞や同じ副詞だけしか、修飾しない。そこであえて取り上げたのは、動詞を修飾しない副詞として、とても特異な語であるからだ。また後述したいが、形容詞の仲間に入るような、位置をしめ、感嘆文ではキーワードとして、重要な働きをする。（訳の語順については、次の形容詞のところでもみていきたい。）

#### (5) 場所や時における、大、中、小の語順。

- ⑥ He lives in a small house in Urasoe City in Okinawa.

彼は、沖縄の浦添市にある小さい家で暮らしている。

- ⑥' I get up at six thirty every morning.

私は、毎朝6時30分に起きます。

上の⑥ ⑥' も日本語の順序が、大→中→小であるのに対し英語では、小→中→大と逆になっている。そのことは、基本的に主語のスタート後は、全部逆語順で和訳できることになる。

### 5 形容詞について

形容詞は、英語でadjectiveといい、それは、subject（主語）やobject（目的語）にadd（付け足す）という意味から成り立っている。また主語や目的語は、名詞類であるので、前述したように、それは名詞類を修飾することになる。形容詞の補語用法（叙述用法）については、主要素となるので、その位置は定まっている。ここでは、限定用法としての形容詞の位置について、（被修飾語の名詞類を軸に）、例文をとおして考察していく。

#### (1) 形容詞が一語のとき（冠詞及び代名詞や名詞の所有形も含む。）

- ① I keep a very big dog.

私は、とても大きな犬を飼っている。

上の文では、目的語のdogの前に、a（冠詞）、very（副詞だが形容詞や副詞だけを修飾する特異な語）、big（形容詞）の順に並んでいる。そのveryはbigを修飾し、さらにbigがdog（名詞）を修飾している。この語順は、日本語と同じであることを示している。さらに一語の形容詞が並立して同時に同じ名詞を修飾するとき数量や性質によって順序がだいたい決まっているが、ここでは細かいことに触れずに止めておく。

#### (2) 形容詞が句や節のとき（前置詞句と準動詞句を分けておきたい。）

- ② The book on the desk is mine.    ②' I have a lot of things to tell you.

その机の上の本は、私のものです。    私は、あなたに告げたいことがいっぱいある。

上の②の文では、on the deskがその前にあるbookを修飾している。また②'の文では、to tell youがその前にあるthingsを修飾している。つまり後置修飾であることを示してい

る。(ここで前置詞句と準動詞句の二つ分けたのは、準動詞句は、動詞+目的語等のようになりかなり複雑で注意すべきと思えるからである。詳しくは、後で考察したい。)

③ That is the man (whom; that) I met at the bank yesterday.

あの人は、私が昨日銀行で会った方です。

上の文では、I met at Naha yesterdayという節(関係代名詞に導かれた節、目的格のために省略される関係代名詞である。)が、その前にあるman(先行詞)を修飾している。これもまた、句と同じように日本語の順序と逆の後置修飾であることを示している。

(3) 分詞の形容詞用法(一語のとき、句を成すとき。)

④ The broken cup is Tom's.      ④ The cup broken by Tom was new.

そのこわれたコップは、トムのです。      トムによって割られたコップは、新しかった。

上の文では、④でbrokenという一語の形容詞と同じ扱いであり、cupの前に置かれている。また④のbroken by Tomは、句であり、被修飾語のcupの後に置かれ、後置修飾となっている。

以上のように、形容詞をみてきたが、まとめてみると一語の形容詞(veryも例外として含めたい)は、被修飾語の前に位置し日本語と同じ語順である。ところが句や節は、逆に後置修飾をする。ということになる。さらに文全体で捕らえると、一語の形容詞+名詞を「固まり」ととらえる。ということにすれば、「主語のスタート後は全部逆。」と言うのがここでもいえる。

次の準動詞の考察に入る前に、「語順」をみやすくする、という主旨で、文の要素にそれぞれ番号(0, 1, 2, 3, 4.)を与えることにした。また簡単な数学の記号も借りて、利用していくことにする。先にその表記法を下記に示す。

主語 = 0,    動詞 = 1,    目的語 = 2 ; (間接目的語 = 2'),    補語 = 3,    副詞修飾語 = 4.  
 4 = { 場所 ; (where) ; P | 様態や方法 ; (how) || 目的や原因 ; (why) | 時 ; (when) ; T }  
 また、① : 前置詞句 = <前>,    ② : 準動詞句 = ( 1 --- ),    ③ : 節 = [ 0, 1 --- ]

として、その表記に従って、進めていく。

## 6 準動詞について

準動詞とは、動名詞、分詞、不定詞の三つである。それらは元来、動詞であったものが、その性質を有しながら、名詞や形容詞さらに副詞の用法へと変化したものである。またそれぞれの形や用法には、類似点が多く、複雑であり特に気を付けたい。では動名詞から順を追って考察していく。

(1) 動名詞について

動名詞の形は、(動詞の原形+ing)であり、それは現在分詞と同じである。用法は、呼び名が表すように、動詞を名詞化したものである。(---ing)の和訳は、「---こと」とすればよいが、中には、buildingやmeetingのように完全に名詞化されたものもある。次に例文を通してみていくことにする。

① My hobby is collecting stamps.      ① My sister is collecting stamps.

上の文①は、S+V+Cの第2文型である。まず主語=0, のhobbyには、「は」さらにstampsは、collectingという動名詞の目的語=2, のため、「を」が和訳では、必要となる。

次に文①'は、第3文型であり、is collectingは、(be動詞+現在分詞)の進行形の文である。この① ①'の文では、特に動名詞と現在分詞の見分けに気をつけたい。

- ②  $0:(1\ 2)\ 1\ 3:(1\ 4+\langle\text{前}\rangle)$   
 ②' Seeing her is falling in love with her.  
 ②' To see her is to fall in love with her.

上の文は、②か動名詞による主語及び補語の表現であるのに対し、②'は不定詞の名詞的用法による表現である。二つの文とも和訳では、全く同じであり気を付けたい。さらに目的語となるときは、動詞によって取る形が決まったりするが、それについては、後でまとめたい。①②'の文をまとめると、動名詞は、形は、現在分詞と同じで、用法は、不定詞の名詞的用法(日本語に現れる分においては)と同じであるとこの範囲の考察では、いえる。

(2) 分詞について

分詞には、現在分詞と過去分詞とがある。特にわれわれ日本人にとっては、現在形や過去形までは、素直に理解出来るが、分詞となると、そううまくは、いかないようだ。ここでは基本的な使い方だけみていきたい。

- ③  $0\ h\ 1\ 2$  I am studying English.    ③'  $0\ h\ 1\ 4$  English is spoken in the U.S.A.

上の文は、進行形と受け身形の文である。その二つの文から分かるように、現在分詞は、進行的な意味を持ち、過去分詞は、受け身的な意味を持つ。又過去分詞には、have (has) +p.p.で完了形の文をつくる用法もある。

- ④  $0\ h\ 1\ 2\ 4$  We have studied English for three years.

上の文は、完了形の文である。完了形には、完了、経験、継続、というような意味を表すが、基本的に「動詞に過去から現在に至る時間の幅を与える。」ということを理解したい。

また分詞の形容詞用法については、後の複文のところ、関連させて考察したい。

(3) 不定詞について

不定詞の形は、一般的に(to+動詞の原形)となるが、特別な形として(toのない動詞の原形)原形不定詞と呼ばれるものもある。その用法は、名詞的、形容詞的、副詞的と多用である。また名詞的用法は、「～こと」の和訳で問題にならないようだが、形容詞的用法や副詞的用法は、そう簡単にはいかないようだ。特に副詞的用法は、目的、原因:理由、結果、判断の根拠、条件と場面場面で和訳の工夫を要する。ここでは、中学で出てくる基本的な用法の範囲を主にみていくことにする。先に形容詞的用法と副詞的用法から例文をとおしてみたい。

- ⑤  $0\ 1\ 2:(2)+(1\ 2')$  I have something to give you.    ⑤'  $0\ 1\ 2:(4)+(1\ 4)$  He has no friend to play with.

上の文は、⑤、⑤'とも形容詞的用法である。⑤では、「～したい」または「～べき」という和訳でよいようだ。また⑤'では、「～してくれる」という和訳がふさわしく思える。

- ⑥  $0\ 1\ 2\ 4(1\ 2\ 4)$  We study English to understand the world better.

- ⑥'  $0\ 1\ 3\ 4(1\ 2\ 4)$  I am glad to see you again.

上の文は、⑥、⑥'とも副詞的用法である。⑥は、目的を表す用法で「～ために」という和訳でよいようだ、また⑥'は、原因；理由を表す用法で「～して」という和訳になる。次に名詞的用法についてみていくことにする。ここでは、目的語としての用法に視点を当てたい。それは前述の動名詞との関連をみることになる。

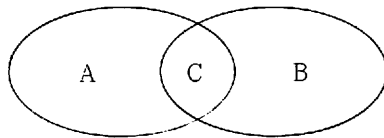
- ⑦  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2(1 & 2) \\ I & want & to & play & tennis. \end{matrix}$       ⑦'  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2(1 & 2) \\ We & enjoy & playing & tennis. \end{matrix}$

上の文は、want+不定詞とenjoy+動名詞の形である。それらの不定詞も動名詞も和訳では、「～こと」でよいようだ。ところが英語においては、この様に動詞によって、決まった目的語の形をとるのがある。つまり⑦と⑦'の目的語の入れ替えは、できない。

- ⑧  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2(1 & 2) \\ He & likes & to & play & tennis. \end{matrix}$       ⑧'  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2(1 & 2) \\ He & likes & playing & tennis. \end{matrix}$

上の文は、like+不定詞とlike+動名詞の形である。そのことは、likeの様に目的語の形を両方取る動詞もあることを示している。また⑧と⑧'は、まったく同じ和訳になる。

次にそれらを、集合の記号を使って表してみると下図のようになる。



A = { 不定詞を目的語に取る動詞の仲間。 }

B = { 動名詞を目的語に取る動詞の仲間。 }

C = A ∩ B = { 不定詞も動名詞も両方取る仲間。 }

\* A-C = { want, wish, hope, decide, agree, would like, plan, expect, etc - - - }

\* B-C = { enjoy, finish, stop, practice, mind, give up, (前置詞) }

\* C = { like, love, begin, hate, start, (remember, forget, try, ---) etc - - - }

最後にCの仲間であるが、不定詞を取る場合と動名詞を取る場合とでは、意味が違ってくる動詞についてみておきたい。それらの例として、rememberをみていきたい。

- ⑨  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2(1 & 2 & 4) \\ I & remember & seeing & him & before. \end{matrix}$       ⑨'  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2(1 & 2 & 4) \\ I & remember & to & see & him & this & afternoon. \end{matrix}$

上の文の⑨のseeingは、「～したこと」と過去の事柄を表し、⑨'のto seeは、「～すること」と未来の事柄を表す。さらにそのことは、目的語にどれを取るかという動詞の性質の一面を表していると思える。

## 7 疑問文及び否定文について

### (1) yes/no疑問文と否定文

英語における疑問文と否定文は、Be動詞の本動詞用法以外は、助動詞 (helping verb) の働きによる。まず疑問文からみていくことにする。疑問文は、主語=0、の前に (H,h) { p.15参照 } を出すか、Be動詞の本動詞を出すかでつくる。それを数直線的に表現すると、(-H, -h, or -1) とその位置を示せる。つまりその位置は、日本語の疑問文を示す「～か」を表す位置といえる。また否定文も同様に (H, h) または、Be動詞の本動詞後に +not でつくる。

次にいくつか例文を挙げて、具体的に示しておきたい。

①  $\overset{0}{\text{You}} \overset{\text{H}}{\text{can}} \overset{1}{\text{drive}} \overset{2}{\text{a car.}}$

①'  $\overset{-\text{H}}{\text{Can}} \overset{0}{\text{you}} \overset{1}{\text{drive}} \overset{2}{\text{a car?}}$

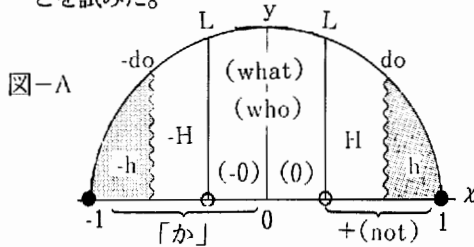
②  $\overset{0}{\text{He}} \overset{1}{\text{is}} \overset{3}{\text{a teacher.}}$

②'  $\overset{-1}{\text{Is}} \overset{0}{\text{he}} \overset{3}{\text{a teacher?}}$

③  $\overset{0}{\text{I}} \overset{1}{\text{like}} \overset{2}{\text{English.}}$

③'  $\overset{0}{\text{I}} \overset{\text{H}}{\text{don't}} \overset{1}{\text{like}} \overset{2}{\text{English.}}$

cf: ここで疑問文と否定文、さらに主語の動詞や助動詞への影響の範囲も含めて、図示することを試みた。



- \* do (does, did) は、Hとhの境界上にある。
- \* Be動詞の本動詞は、1や-1上にある。
- \* hとlは、主語の影響を受ける。
- \* Lは、主語との境界線である。
- \* -Hと-hは、疑問を表す「～か」の位置。
- \* H, -H, h, -hは、+notで否定を表す。

(2) Wh- 疑問文 (情報疑問文)

Wh- 疑問文は、先のyes/no 疑問文のつくり (-H, -h, -1) を踏まえ、情報としてたずねたいことをWh- にしてさらに (-H, -h, -1) の前に出すことによりつくる。つまりそれらは、-1, -2, -3, -4の位置に来るといえる。これも具体例を挙げておく。

④ - - - (-1) の例 ;  $\overset{-1}{\text{What}} \overset{-\text{H}}{\text{did}} \overset{0}{\text{you}} \overset{1}{\text{do}} \overset{4}{\text{last night?}}$

⑤ - - - (-2) の例 ;  $\overset{-2}{\text{What}} \overset{-\text{H}}{\text{do}} \overset{0}{\text{you}} \overset{1}{\text{have}} \overset{4}{\text{in your bag?}}$

⑥ - - - (-3) の例 ;  $\overset{-3}{\text{How}} \overset{-1}{\text{are}} \overset{0}{\text{you}} \overset{4}{\text{today?}}$

⑦ - - - (-4) の例 ;  $\overset{-4}{\text{Where}} \overset{-\text{h}}{\text{have}} \overset{0}{\text{you}} \overset{1}{\text{been?}}$        $\overset{-4}{\text{When}} \overset{-\text{H}}{\text{did}} \overset{0}{\text{you}} \overset{1}{\text{buy}} \overset{2}{\text{the book?}}$

$\overset{-4}{\text{How}} \overset{-\text{H}}{\text{do}} \overset{0}{\text{you}} \overset{1}{\text{go}} \overset{4}{\text{to school?}}$        $\overset{-4}{\text{Why}} \overset{-\text{H}}{\text{do}} \overset{0}{\text{you}} \overset{1}{\text{study}} \overset{2}{\text{English?}}$

ところが主語のWh-は、(-H, -h, -1) などが現れない。そのことについては、次の複文との関連で詳しく考察したい。ここでは、例文を挙げておきたい。

⑧ - - - (-0) の例 ;  $\overset{-0}{\text{Who}} \overset{1}{\text{made}} \overset{2}{\text{the chair?}}$        $\overset{-0}{\text{What}} \overset{1}{\text{brought}} \overset{2}{\text{you}} \overset{4}{\text{here?}}$

上の文の⑧は、図-A中の(-0)上にある(Who)や(What)として疑問文「～か」を表す範囲とする。また(0)上にある(Who)や(What)は、複文における節としての用法として区別する。その例を挙げておく。

⑧'  $\overset{-\text{H}}{\text{Do}} \overset{0}{\text{you}} \overset{1}{\text{know}} \overset{2}{\text{who}} \overset{2}{\text{made}} \overset{2}{\text{the chair?}}$       ⑧''  $\overset{1}{\text{Tell}} \overset{2}{\text{me}} \overset{2}{\text{what}} \overset{2}{\text{brought}} \overset{2}{\text{you}} \overset{2}{\text{here.}}$

## 8 複文について

ここでは、項目名を複文としたが、関係代名詞、関係副詞、間接疑問文という視点で、捉えていく。さらにこれまで考察してきた準動詞句や疑問文さらに感嘆文との関連も含めて、「発展及びまとめ」としての意味あいを持つ項目にしたい。

### (1) 関係代名詞

①  $0\ 1\ 2\ -[0\ 1\ 4]$  I have an uncle who lives in Tokyo. ①  $0\ 1\ 2\ +[0\ H\ 1\ 2]$  He has a dog which can do many tricks.

②  $0\ +[0\ h\ 1\ 2\ 4]$  The boys who are playing soccer over there are my classmates.

②  $0\ + (1\ 2\ 4)$  The boys playing soccer over there are my classmates.

③  $0\ -[0\ 1\ 2]$  The girl who has long hair is Mary. ③  $0\ + \langle \text{前} \rangle$  The girl with long hair is Mary.

上の①～③は、全て主格の関係代名詞が使われている。ここでは特に節や句の表記の仕方気に付けてほしい。また、主格の関係代名詞は、省略されない。

④  $0\ 1\ 2\ +[0\ 1\ 3]$  I have a friend whose father is a doctor. ④  $0\ 1\ 2\ +[0\ 1\ 3]$  He keeps a dog whose tail is long.

上の文は、所有格の関係代名詞であり、これもまた主格と同じように省略されない。

⑤  $0\ 1\ 3\ +; [2][0\ 1\ 4]$  This is the book (which) I read yesterday.

⑤  $0\ 1\ 3\ +; [2][0\ 1\ 4]$  That is the girl (whom) Tom likes very much.

上の文は、目的格の関係代名詞である。これは、( )で示したように省略可である。

### (2) 関係副詞

⑥  $0\ 1\ 3\ -[4][0\ 1\ 2\ 4]$  This is the restaurant where I had dinner last night.

⑦  $0\ 1\ 3\ +; [4][0\ h\ 1\ 2]$  Tomorrow is the day when I have to finish my report.

上の文は、⑥が場所 (restaurant) をまた⑦が時 (day) を修飾している。つまり先の関係代名詞と同様に形容詞節を導いている。またその二つをまとめて、関係詞とも呼ばれる。

### (3) 間接疑問文

⑧  $0\ 1\ 2; [4][0\ 1]$  I know where he lives. ⑧  $-H\ 0\ 1\ 2; [4][0\ 1\ 4]$  Do you know how he came here?

⑩  $1\ 2; [4][0\ 1\ 3\ 4]$  Tell me why you were late today. ⑩  $0\ H\ 1\ 2; [4][0\ H\ 1\ 4]$  I don't know when he will come here.

⑫  $0\ 1\ 2; [0\ 1\ 2]$  I know who made the chair. ⑫  $1\ 2; [3\ 0\ 1]$  Tell me who he is.

⑭  $0\ H\ 1\ 2; [2][0\ 1]$  I couldn't understand what he said. ⑭  $0\ 1\ 3; [2][0\ h\ 1]$  This is what I have wanted.

上の⑭は、間接疑問文ではなく、関係代名詞のwhat=(the thing which)の用法であるが、形式上は、区別されないので、ここで挙げてみた。

(4) その他 (感嘆文も含む。)

15  $\overset{0}{I} \overset{1}{don't} \overset{2;(4)}{know} \overset{(1)}{where} \overset{(1)}{to} \overset{(1)}{go}.$

16  $\overset{1}{Tell} \overset{2'}{(2)} \overset{(1)}{me} \overset{(1)}{what} \overset{(1)}{to} \overset{(1)}{buy}.$

17  $\overset{0}{I} \overset{1}{don't} \overset{1}{think} \overset{2}{{}=[ 0 \ 1 \ 3 ]} \overset{(3)}{(that)} \overset{(3)}{he} \overset{(3)}{is} \overset{(3)}{handsome}.$

18  $\overset{0}{He} \overset{1}{is} \overset{3}{very} \overset{3}{old}.$

18'  $\overset{-3}{How} \overset{-1}{old} \overset{0}{is} \overset{0}{he}?$

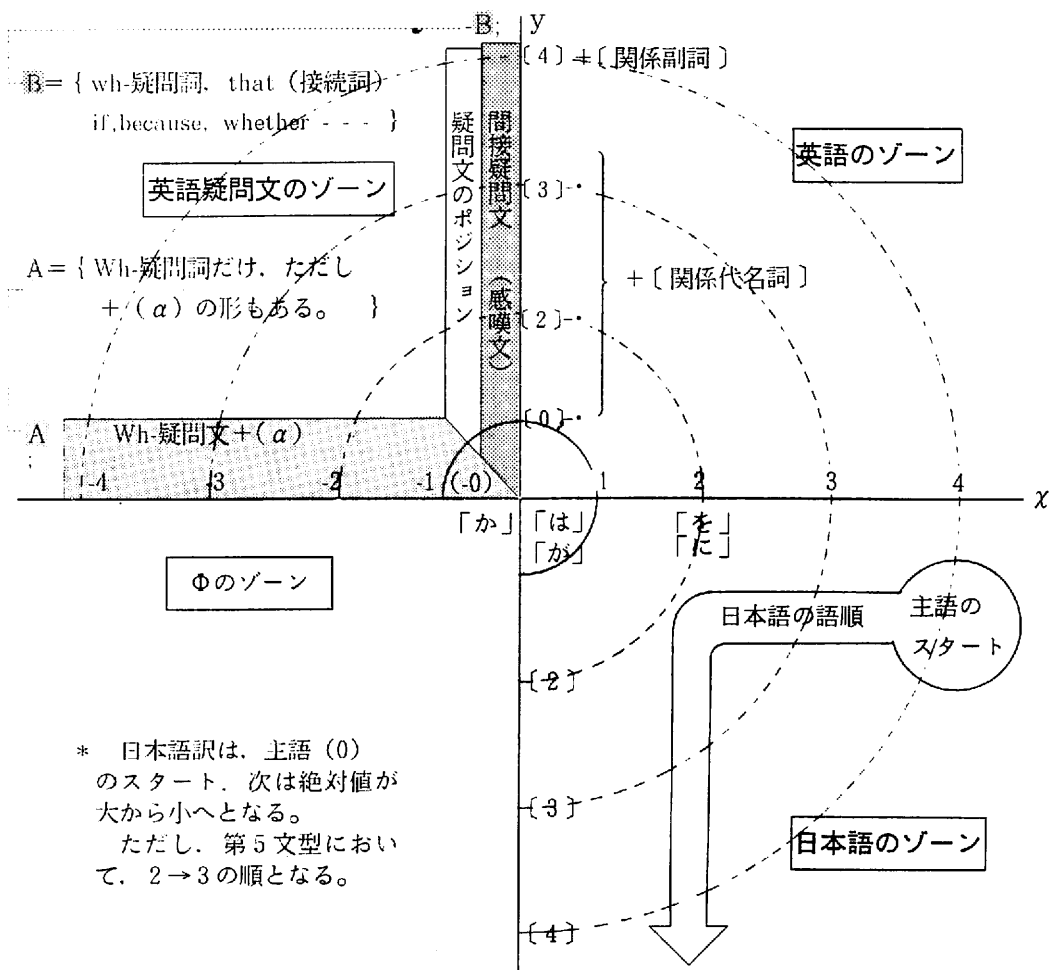
18''  $\overset{[3]}{How} \overset{0}{old} \overset{1}{he} \overset{1}{is}!$

(5) まとめとしてのグラフによる表示の試み (図-B)

\* y軸上にwh-がきて、間接疑問文や感嘆文をつくる。

\* y軸上に名詞(先行詞)がきて、+[関係詞]その内の〔0〕,〔2〕,〔3〕+[関係代名詞]、〔4〕+[関係副詞]となる。

図-B



\* 日本語訳は、主語(0)のスタート。次は絶対値が大から小へとなる。  
ただし、第5文型において、2→3の順となる。

#### IV 授業実践（指導法の工夫）

##### 1 基本5文型の指導

英文は、主語 (Subject)、動詞 (Verb)、目的語 (Object)、補語 (Complement) の4つの主要素と修飾語 (Modifier) から構成されている。基本5文型とは、動詞の性質（後に続く目的語や補語の現れ方）によって、英文を5つのパターンに分類したものである。それらは、表①のようにまとめて表すことができる。

表①

目的語の有無	補語の有無	語順と文型		動詞の主な例
自動詞 (目的語無し)	完全自動詞	S+V	第1文型	V1 = { walk, go, come, fly, be + p - - - }
	不完全自動詞	S+V+C	第2文型	V2 = { BE, become, look, turn, - - - }
他動詞 (目的語有り)	完全他動詞 (授与動詞)	S+V+O	第3文型	V3 = { have, play, like, know, - - - }
		S+V-O+O	第4文型	V4 = { GIVE, tell, show, make, - - - }
	不完全他動詞	S+V-O+C	第5文型	V5 = { call, name, elect, make - - - }

次にそれぞれの要素の働きや特徴及び品詞について、日本語との比較をしながらまとめてみると、表②のように表すことができる。

表②

要素	記号	働きや日本語での特徴	数字と指の名前		品詞
主語	S	文の中心で文の主である。 「～は、～が、」にあたる。	0	親指	名詞類
動詞	V	動作や状態を表す。 一般的にウ段終わる。	1	人差し指	動詞
目的語	O	動作の対象となる語である。 「～を、～に、」にあたる。	2	中指	名詞類
補語	C	主語又は、目的語を補足説明する。 「～を、～に、～のように、」あたる。	3	薬指	名詞又は 形容詞類
修飾語	M	4主要素を修飾し内容を豊かにする。 (where, how, why, when,) (形語+名+形句)	4	小指	副詞又は 形容詞類

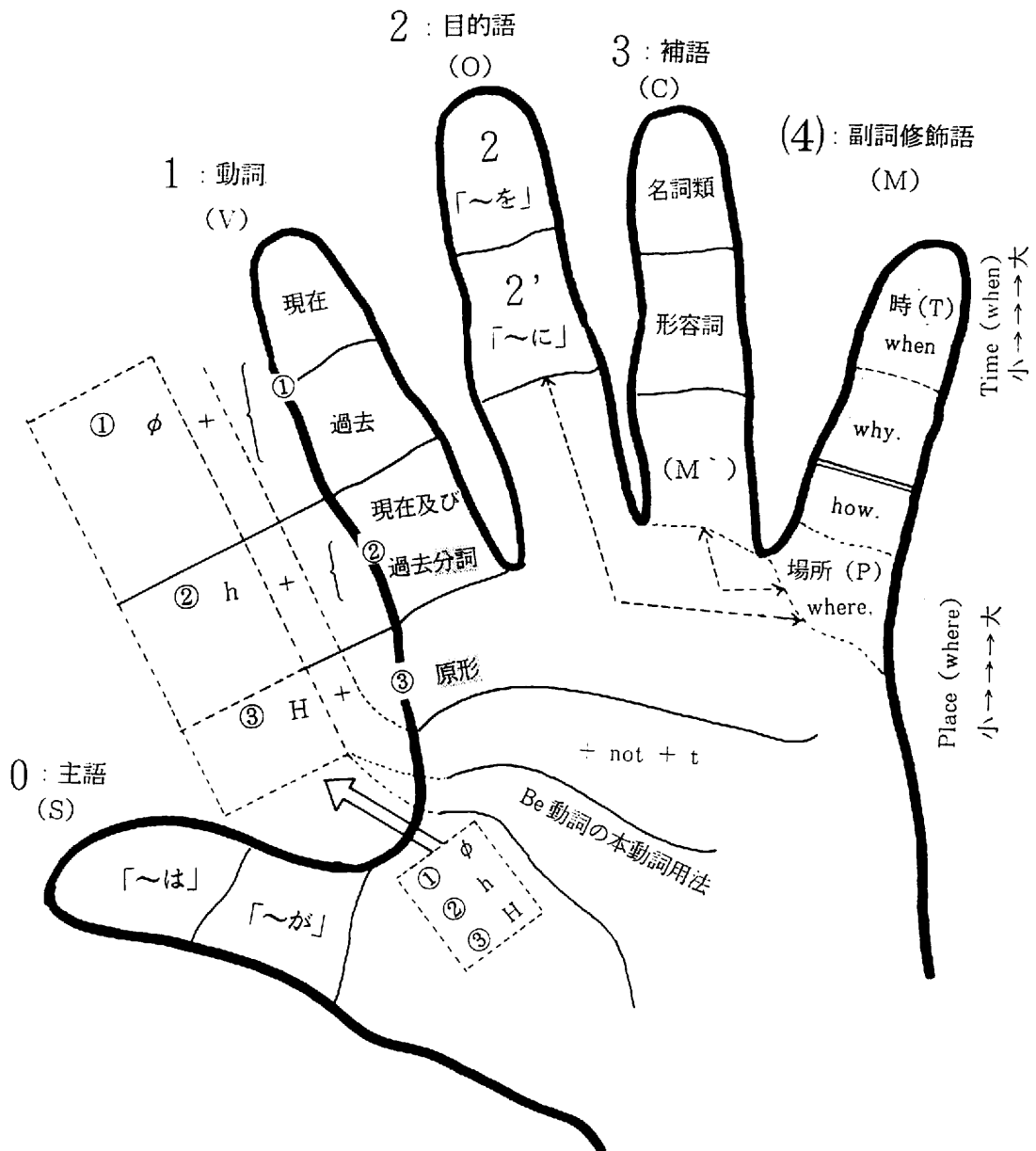
次に動詞 (V1～V5) の特色を比較しながらみていくことにする。

自動詞の自とは、主語自身だけに関すること、を表す。また自動詞は、主語自身の動作や存在を表す動詞 (V1) と主語自身の状態を表す動詞 (V2) がある。この (V2) は、主語の状態を補足説明する語 (主格補語) を必要とする。このように、自動詞は、2種類に分けられる。

一方、他動詞の他とは、動作が主語以外の他のものへと伝わっていくこと、を表す。そして、その動作の伝わる対象が目的語である。他動詞のなかには、目的語を1つ取って文が完成する。動詞 (V3) や目的語を2つ取る動詞 (V4)、それに1つの目的語とその補語 (目的格補語) を取ってはじめて文が完成する動詞 (V5) の3種類に分けられる。



2 基本5文型への数字表記



(cf) h, H は, +not で否定文を又主語の前に出て疑問文をつくる。

(cf) アメリカ人の数の教え方は、指を親指から順に小指まで立てていく。(手のひらから指先へ) …… \*小指に注意。

一方、私たち日本人は、指を折って数える。(指先から手のひらへ) ここでは、英語と日本語の語順の違いをみるため、親指の次に小指、中指、薬指、最後に人差し指の順に折って数えることにする。

3 文の要素内の語順（列車の車両；席順に例えて）

主語 (S), 目的語 (O), 及び補語 (C) のA型…… (名詞類)  
 (0, 2, 3の車両の形)

冠詞や所有形	1語の形容詞	* 形容詞・句・節
a, (an) the my, Tom's	+ (very) + 数量 + 性質 + 名詞類	<前置詞句> + (不定詞句) ← 分詞) → [ 節 ]

補語 (C) のB型…… (形容詞) (3の車両)

特別な副詞	*
very so too	+ 形容詞

cf; 形容詞は, (adjective) と呼ばれ, 主語 (subject) や目的語 (object) に付けたず (add) という意味を持つ。  
 ; (ject) とは, 投げる, という意味を語源に持つ。

動詞 (V); 助動詞も含む…… (動詞) (1の車両)

助動詞	特別な副詞 (頻度)	動詞の形	*
① ϕ ② h ③ H	+ { not } + { t }	..... + ① 現在及び過去形 ..... + ② 現在及び過去分詞 ..... + ③ 原形	} 動詞
cf; Be 動詞の本動詞用法 + (not) + (t) + ϕ			

cf; H は, Helping verb を表す。cf; t は, 特別な Time を表す。; ϕ は, 無を表す。

h = {be : is, am, are, : have, has, (was, were : had)}

H = {can : will : must : may : shall : do, does (could : would : o : might : should : did)}

H' = {be able to : be going to : have to }

t = {always ; usually ; sometimes ; ever ; never ; really ; often ; only ; just …… }

cf; h や H は, not をつけて否定文になったり, 主語の前に来て疑問文になる。

また, 英語の否定文には, no + 名詞の表現もある。

疑問文には, 付加疑問もあるが, それは上記の否定文と疑問文が基礎となる。

修飾語は、形容詞と副詞である。形容詞については、先に学習した。ここでは、副詞についてまとめてみた。…… (副詞) (4の車両)

場 所 (P)	様態; 方法	目的; 理由	時 (T)
Place (where) 小 → → → 大	Manner; Way (how)	Reason; Purpose (why)	Time (when) 小 → → → 大

cf: 副詞は、(adverb) と呼ばれ、動詞 (verb) に付けたす (add) という意味をもつ。

又、副詞の位置は、強調や長い副詞のときには、文頭にだしたりすることもある。

特に、One day, Long long time ago. などは、慣用的に文頭にだす。

0 1 4 -P -T  
1: I came to school at eight this morning.

0 1 3 + <前句>  
2: Emily is a very pretty girl with blue eyes.

-h 0 1 2 + (1 2 4-p)  
3: Do you know the girl playing tennis over there?

0 1 2 = [ 0 H 1 2 ]  
4: I hope (that) you will pass the examination.

1 2 + [ 0 1 2 4-p ]  
5: Look at that very tall boy who has a ball under his arm.

0 t 1 2' 2 4-T  
6: My father sometimes gives me some money on pay days.

0 H 1 2 3  
7: Only you can make him happy.

cf: (0) + 「は、が」 (2) + 「を、に」 (-H, -h) + 「か」さらに (1) からスタートは、「なさい。」などの語を補う。

そのことは、動詞の前に投げ出された名詞が、主語であり、後ろに投げ出された名詞が目的語となることを意味している。次に主語の前に助動詞を置くことにより疑問文ができ、また主語がなく動詞 (原形) から始まる文は、命令文となることを示している。

上の例文をみると、副詞句の語順は、すべて日本語と逆であるといえる。ところが視点を交えてみると実は、英語も日本語も全く同じ感覚でものを捉えていることに気付く。それは、動詞に意味・関連の濃いものがその動詞に最も近い位置にあり、薄くなるにつれ遠くに位置する。さらに気をつけたいことに、動詞に向かって手 (前置詞、格助詞; 日本語は全て) を差し延べていることである。唯一の違いは、日本語は、動詞が文末に来ることである。またそのことは、形容詞句・節の後置修飾の表現が日本語にないことも大いに関連していると考えられる。つまり日本語は、すべて句・節末に密度の高い語を置く、そのわけは、そこが動詞に最も近いためといえる。

## V 研究の成果と今後の課題

1 Dr. Palmer による Verb Patterns の数字表記による分析。(研究の成果として)

P 1. (Patterns 1.)  $\begin{matrix} 0 & 1 & & 2 & & 0 & 1 & & 2 \\ \text{He cut his fingers.} & & & \text{We saw your brother.} \end{matrix}$

P 2.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2 & (1) & 0 & h & 1 & 2 & (1 & 2) & 0 & 1 & 2 & (1) \\ \text{He wants to go.} & & & \text{I have promised to help them.} & & & & & & \text{They decided not to go.} \end{matrix}$

P 3.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2 & 3 & (1 & 3) & 0 & 1 & 2 & 3 & (1 & 2) \\ \text{He wants me to be early.} & & & \text{I asked him not to do it.} \end{matrix}$

P 4.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2 & 3 & (1 & 3) & 0 & 1 & 2 & 3 & (1 & 3) \\ \text{They believed him (to be) innocent.} & & & \text{I consider it (to be) a shame.} \end{matrix}$

P 5.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2 & 3 & (1 & 2) & 1 & 2 & 3 & (1) & 1 & 2 & 3 & (1 & 2) & 0 & 1 & 2 & 3 & (1 & 4) \\ \text{I made him do it.} & & & \text{Let me go.} & & & & & & \text{Watch me do it.} & & & & & \text{I heard him come in.} \end{matrix}$

P 6.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2 & 3 & 0 & 1 & 2 & 3 & (1 & 4) \\ \text{He kept me waiting.} & & & \text{I found him working at his desk.} \end{matrix}$

P 7.  $\begin{matrix} H & 1 & 2 & 3 & 0 & 1 & 2 & 3 & 1 & 2 & 3 \\ \text{Don't get your clothes dirty.} & & & \text{The sun keeps us warm.} & & & & & \text{Set me free.} \end{matrix}$

P 8.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2 & 3 & 0 & 1 & 2 & 3 \\ \text{They elected him king.} & & & \text{They named their son Henry.} \end{matrix}$

P 9.  $\begin{matrix} 0 & H & 1 & 2 & 3 & 0 & 1 & 2 & 3 & 4 \\ \text{You must get your hair cut.} & & & \text{The soldier had two horses shot under him.} \end{matrix}$

P 10.  $\begin{matrix} 1 & 2 & 4 & 0 & 1 & 2 & 4 & 0 & 1 & 2 & 4 \\ \text{Put it here.} & & & \text{He took his hat off.} & & & & & \text{Mr. Smith showed me to the door.} \end{matrix}$

P 11.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2 = [0 & H & 1] & -H & 0 & 1 & 2 = [0 & H & 1] \\ \text{I hope (that) you will come.} & & & \text{Do you think (that) it will rain?} \end{matrix}$

P 12.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2' & 2 = [0 & h & 1] \\ \text{I told the man (that) he was mistaken.} \end{matrix}$

$\begin{matrix} 0 & 1 & 2' & 2 = [0 & H & 1 & 3] \\ \text{I warned you (that) he would be late.} \end{matrix}$

P 13.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2;(4) & (1 & 2) & 0 & H & 1 & 2;(2) & (1) \\ \text{I wonder how to do it.} & & & \text{I don't know what to do.} \end{matrix}$

P 14.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2' & 2;(4) & (1 & 2) & 1 & 2' & 2;(2) & (1) \\ \text{We showed him how to do it.} & & & \text{Please tell me which to take.} \end{matrix}$

P 15.  $\begin{matrix} 0 & 1 & 2;(4) & [0 & h & 1] & -H & 0 & 1 & 2;(3) & [0 & 1] \\ \text{I wonder why he has not come.} & & & \text{Do you know who he is?} \end{matrix}$

P 16.  $\begin{matrix} 1 & 2' & 2;(3) & [0 & 1] & 1 & 2' & 2;(4) & [0 & 1 & 2] & -H & 0 & 1 & 2' & 2;(3) & [0 & 1] \\ \text{Tell me what it is.} & & & \text{Ask him where he put it.} & & & & & & \text{Can you tell me how high it is?} \end{matrix}$

- P 17. (A) Please stop talking. He enjoys playing tennis.  
 (B) He began talking. He began to talk.  
 (C) Your work needs correcting (= to be corrected).
- P 18. (A) I gave the money to my friend. They told the news to everyone they met.  
 (B) Thank you for your kind help. Add this to what you already have.
- P 19. (A) Have they paid you the money? Will you lend me five shillings?  
 (B) She made herself a cup of tea. Her father bought her a new dress.  
 (C) I envy you your fine garden. Forgive us our sins.
- P 20. We walked (for) five miles. The rain lasted all day.  
 It cost ten shillings. Will you stay (for) the night?
- P 21. Fire burns. Birds fly. The sun was shining.
- P 22. This is a book. The weather has become warmer. His dream came true.
- P 23. Stand up. The sun rises in the east. He will come as soon as he is ready.
- P 24. He called on me. It depends on the weather. Look at the blackboard.
- P 25. (A) He came to see me. We stopped to have a rest.  
 (B) She happened to notice it. They seemed not to notice it.  
 (C) How can I get to know her? How did you come to know him?  
 (D) This house is to let. We are to start at once.

2 今後の課題

テーマに「感覚でつかむ」ということを掲げてきたが、今までの考察結果を見る限りにおいて具体性に乏しいように思われる。そのことは、検証授業の二時間だけでは、充分な具体的活動の場とするには、無理があったことが反省される。

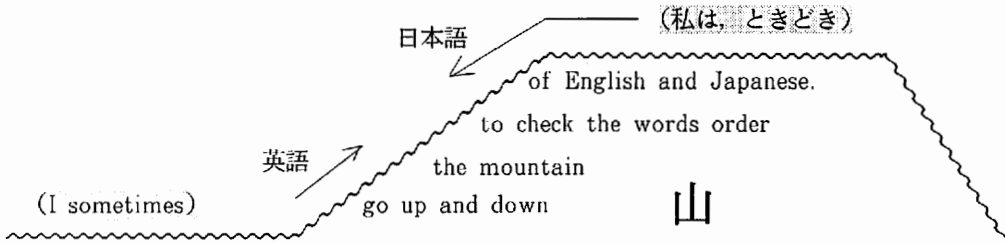
そのテーマに近づく方法として、今後、考察してみたいことを下記に示しておきたい。

- (1) 鏡による英語及び日本語の投影法（主語以外） cf, (Mirror)

(彼は), 5年間日本に住み続けている。M (鏡) (He) has lived in Japan for 5 years.



- (2) 主語 (+t) の登山（英語）と下山（日本語）法



英語と日本語との語順を考察してきたが、最も重要な結論として、「日本語と英語の共通点に主語以外（述部）は、全て動詞に向く（支配される）と言える。ところが相違点として、英語が、動詞の後に、意味・関連の強い順に、目的語や補語さらに副詞修飾語とそれらを従えるのに対し、日本語は逆に意味・関連の弱い順に、副詞修飾語さらに目的語や補語とそれらが動詞を導き出す。」といえる。それを、(←, →) で表示すると、英語；(V←O, C←M) であり、日本語；(M→O, C→V) と表せる。(英語の←の先端が前置詞等であり、日本語の→の末端が格助詞である。) また、述部において動詞が最も重要である、とすれば英語は、(重>軽) で、日本語は、(軽<重) といえる。

以上述べてきた事柄を、授業の場面でどういう方法で生徒に気付かせ、自ら思考し、興味を持って取り組みせたらよいか。また音声組織になじませる学習指導との有機的な活動場面をどう設定していくか。さらに数字表記による指導法の生徒にもたらす弊害はないか。又どの時期からその指導法を用いたら効果的か。中学での学習を高校での学習の基礎として捉えたとき、その指導の方向性をどう位置付けるか。等いろいろな課題があり、今後の授業実践を通しての分析と工夫が必要とされる。

<<主な参考文献・引用・資料>>

「標準総合英語」	堀口俊一 他 2 名	桐原書店
「英語の発想・日本語の発想」	外山滋比古	日本放送出版協会
「コミュニケーションを目指した英語の指導と評価」		文部省
「準動詞（動名詞・不定詞・分詞）スピード征服」	尾崎哲夫	明日香出版社
「英語教師の文法指導研究」	小寺茂明 他 2 名	三省堂
「IDIOMATIC AND SYNTACTIC ENGLISH DICTIONARY」		開拓社

cf; I thank Mr. Van Dyke Dale, AET for helping me with the report.